第４章　考　　察

１　出雲型石棺式石室の終焉

島根大学法文学部　岩　本　　崇

はじめに

出雲東部地域における古墳時代首長墓の築造は、いかなる社会背景のもとに終焉するに至ったのか。この点についての議論を重ねることは、古墳時代の出雲地域の特質を追究することはもちろん、その後の律令社会における出雲国の成立と展開を論ずる際にも重要な視座をもたらす。

そして、出雲における古墳時代社会から律令社会への転換を考究する際に、鍵となる材料として提示しうるのが墳墓に採用された埋葬施設である。埋葬施設に反映された在地性と広域性の相関関係の検討によって、終焉期の古墳築造の背後にある社会関係を読み解くことを期待しうるからである。

本稿では、廻原１号墳の埋葬施設を畿内地域の横口式石槨と比較したうえで、出雲型石棺式石室のなかで位置づけることを通して、出雲東部地域の古墳築造終焉の実態に迫る。さらに、埋葬空間にたいする指向性に着目し、葬送観念や他界観にみる出雲東部地域の特質を浮き彫りとすることをめざす。

（１）研究史と問題の所在

先行研究の論点　出雲東部地域の古墳築造終焉期に首長墓に採用された埋葬施設は、石棺式石室である〔山本 1956・1964〕。この石棺式石室にたいする認識の高まりと地域における須恵器編年の構築という二つの問題への取り組みが同期することによって、出雲地域では終末期古墳の枠組みが素描された。その結果、出雲地域における古墳築造が、石棺式石室とともに終焉を迎えると理解できるようになったのである。

石棺式石室は、先学によって大きく４時期に整理される〔出雲考古学研究会 1983・1987〕。終焉期にあたる４期には、定型化した石棺式石室が消滅し、玄室の平面形態がそれまでの横長長方形から、縦長長方形の小型化した石室になるという。さらにその変化の背景には、畿内地域の横口式石槨の影響が想定された〔赤沢・広江 1987〕。

こうした出雲東部地域の古墳築造終焉期に、畿内地域の横口式石槨とのかかわりを考慮する見方は、廻原１号墳の埋葬施設が河内地域の「横口式石棺」と近似するという梅原末治の指摘を嚆矢とし〔梅原・石倉 1920〕、現在はほぼ定説化しているようだ〔赤沢・広江 1987、桑原・丹羽野・角田・西尾 1987、松本 1990・1997、西尾 1995、大谷 1996・2009、角田・守岡・原田 1997、仁木 2003・2010 など〕。それだけでなく、横口式石槨の影響を直接的に受けた廻原１号墳を介して、若塚古墳や鏡北廻古墳など在地の石棺式石室の平面形態が縦長長方形に変容したとする考えもある〔桑原・丹羽野・角田・西尾 1987、大谷 1996、角田・守岡・原田 1997、仁木 2010〕。このように、廻原１号墳は、出雲地域の古墳築造終焉期における画期をなす古墳として、石棺式石室の編年はもちろん終末期古墳の地域的展開を考えるうえでもきわめて重要な位置を占めているのである。

また、廻原１号墳の位置づけは、出雲地域の首長墓築造終焉の暦年代にも少なからず影響をおよぼす。大阪府お亀石古墳、鉢伏山西峰古墳、観音塚古墳、観音塚西古墳の影響という畿内地域との対比から、７世紀中頃〔赤沢・広江 1987、西尾 1995、松本 1997、角田・守岡・原田 1997、大谷 2009、

角田 2012〕、あるいは７世紀後半〔仁木 2010〕という年代観が示されている。

いっぽうで、廻原１号墳の埋葬施設にみる、刳り抜き玄門や玄門閉塞石を受ける刳り込みが、在地の出雲型石棺式石室の特徴と指摘される点もみのがせない〔出雲考古学研究会 1983、赤沢・広江 1987、西尾 1995〕。廻原１号墳の埋葬施設には、広域性と在地性という二面性がうかがわれるのである。

対象資料と方法　先行研究の論点を整理するなかで、廻原１号墳の埋葬施設の位置づけを考えるにあたり、比較検討の対象とすべき例がおおむね明らかとなった。まず、畿内地域の横口式石槨としては、形態の類似するお亀石古墳・鉢伏山西峰古墳・観音塚西古墳など、刳抜式石棺を石槨部とする例が関連資料となる。出雲地域の事例としては、縦長長方形プランの若塚古墳・鏡北廻古墳・講武岩屋古墳などといった石棺式石室や、これに関連する横穴式石室も検討すべき対象となろう。

本稿では、これらの畿内地域を中心とした横口式石槨、出雲在地の石棺式石室などとの比較から、廻原１号墳の埋葬施設の位置づけを検討するなかで、出雲型石棺式石室が終焉に至る過程を論ずる。とりわけ、埋葬施設の空間構造や空間利用という葬送観念や他界観の本質にかかわる視点から分析することによって、その位置づけをより具体的に示すことを目論む。

（２）廻原１号墳の埋葬施設とその空間構造

概　　要　廻原１号墳の埋葬施設は、玄室・羨道・前庭部という三つの空間からなる（第 31 図）。玄室に流紋岩質軽石火山礫凝灰岩、羨道と前庭部には安山岩という異なる石材が使用される。凝灰岩は直線距離で約 11 ㎞離れた安来市荒島近辺産出のいわゆる荒島石であり、やや遠隔から搬入される。いっぽう、安山岩は松江市和久羅山周辺で産出する和久羅山デイサイトであり、古墳の近辺で調達可能な石材である。

玄室は刳抜式石棺に準ずる構造であり、二つの部材からなる。棺身部は平面形態が主軸にたいして縦長長方形を呈し、内部を箱形に刳り抜く。天井石は板状の扁平な一枚岩であり、外面は平板だが内面を屋根形に加工する。天井石の小口面の片面に刳り込みを設けて、羨道天井石と組み合わせる。棺身部分に刳り抜き玄門をもち、玄門周囲に閉塞石を受けるための浅い刳り込みを備える。床面には、棺身内部の玄門付近を一段高くした梱石状の構造がある。天井石は棺身部にのるのではなく、刳り込みにより組み合わせられる。内部に漆喰はみとめられない。

羨道は大型の板石の腰石と３～４段に平積みされた割石や自然石によって壁体を構築し、超大型の板石の天井石を架ける。両側壁の腰石と天井石は、各一石ずつである。中央に凝灰岩の敷石、その周囲に安山岩の礫敷をほどこして床面を構成したようだ。前庭部の壁体は、羨道と一体的に構築される。

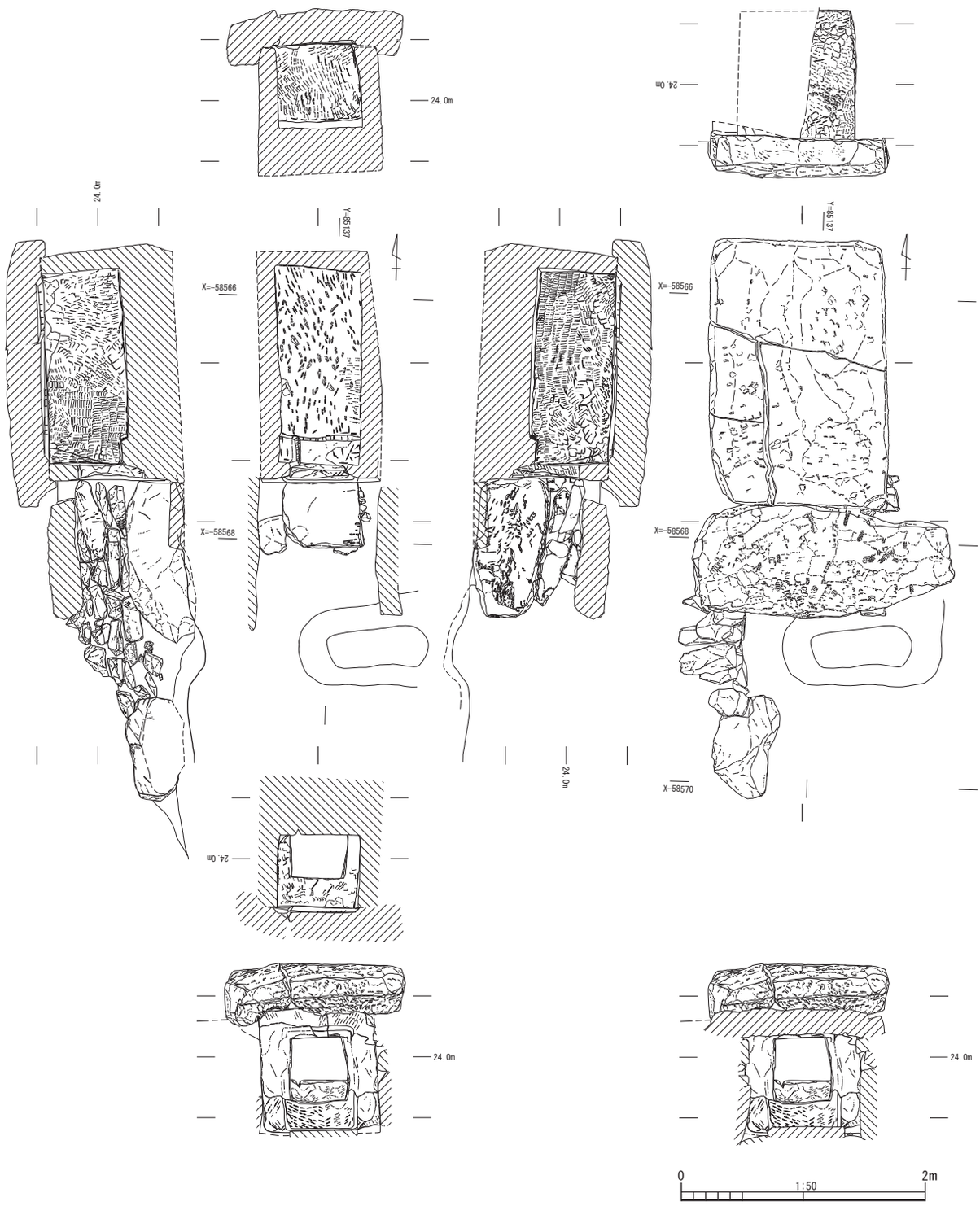
規模は、全長７ｍに復元できる。玄室内法は全長 1.64 ｍ、最大幅 71 ㎝、最大高 70 ㎝である。玄室外法は棺身部分が全長約 1.95 ｍ、幅約１ｍ、高さ約１ｍであり、天井石を含めると全長約 2.2 ｍ、幅約 1.5 ｍ、高さ約 1.35 ｍとなる。玄門は幅約 45 ㎝、高さ約 35 ㎝と狭く、玄門周囲に閉塞石を受ける深さ１～２㎝ほどのごく浅い刳り込みがある。玄門の閉塞は、幅約 55 ㎝、高さ 70 ㎝以上の板石一枚による。羨道は幅約１ｍ、長さ約 1.1 ｍと短く、高さも 90 ㎝と低い。羨道の閉塞方法は不明である。前庭部は羨道付近はその幅を同じくして、外方へと幅を広くし、長さは３ｍほどになると推定される。

空間構造にみる特質　空間構造の特徴に、内部空間の中心をなす玄室の天井が、羨道の天井よりも高いという点がある。いっぽうで玄室床面は、羨道床面よりも著しく高い位置にある。そのため、玄室高にあらわれる玄室内部空間は羨道よりも狭くなる。平面的にも羨道の内側が玄室の外側と揃うため、玄室は羨道より空間が狭い。

玄室は石材や構造的特徴、構築過程から、羨道および前庭部とは明確に区別されていたと考える。

羨道では閉塞構造となる石材や盛土などが確認されず、閉塞方法は不明である。玄門の閉塞は、玄室と同じ凝灰岩の板石一枚でおこなう。刳り抜き玄門、玄室内の梱石状の構造、閉塞構造から、玄室空間をほかとは明確に区別しようとする指向性がみてとれる。そこには、玄室を棺にみたてる「開かれた棺」〔和田 1986〕をおさめる九州系横穴式石室の特徴がうかがわれる〔蔵冨士 1997〕。

構築方法にみる特質　構築方法という点では、羨道天井石を架構したのちに、玄室天井石を設置したという手順を、玄室周辺の盛土の堆積状況から確認している。玄室を設置したのちに、盛土をほど



第 31 図　廻原 1 号墳の埋葬施設

こしながら羨道をまずは構築し、最後に玄室の天井石をのせる。構築の前後関係は、埋葬の手順とも連動するであろうから、埋葬施設の比較検討においては重要な視点になりうると考える。

（3）横口式石槨と廻原1号墳の埋葬施設

先行研究において、廻原1号墳の埋葬施設には河内地域の横口式石槨との共通点が指摘されている。それら横口式石槨の特徴は、刳抜式家形石棺に共通する石槨部をもつ点にある。同様の事例は、河内地域だけにとどまらない。ここでは、畿内地域の横口式石槨あるいはそれに近似する例を中心として、刳抜式石棺の小口に横口を設けたとされる埋葬施設を比較検討する。

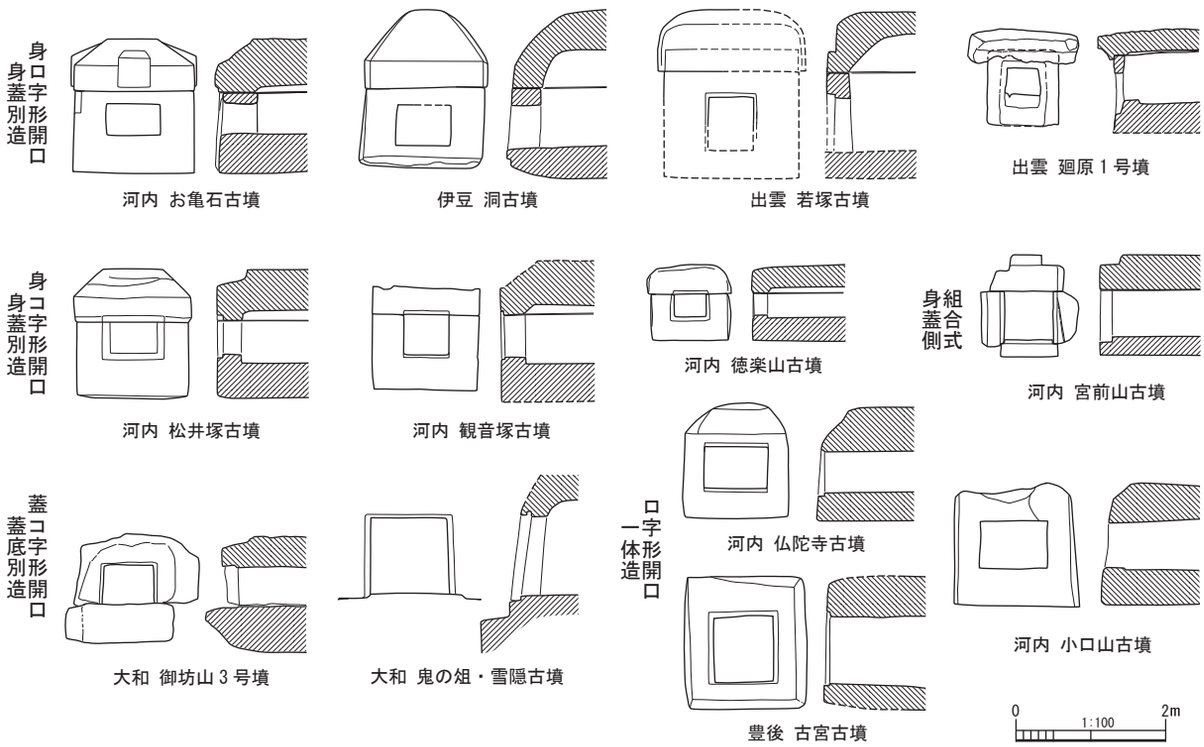
石槨構造と横口の特徴（第32図）　刳抜式石棺に横口を設ける石槨の構造は、身と蓋を別造りとする「身蓋別造り」、底と蓋を別造りとする「底蓋別造り」、全体を一体造りとする「一体造り」に大別できる。底蓋別造りと一体造りは、身蓋別造りとする通有の石棺から構造転換を果たした横口式石槨に特有の空間構造をもつ。とくに、垂直方向の埋葬ではなく、横方向の埋葬に特化した仕様にもとづく点から、画期的な構造と評価できる点が重要である。

身蓋別造りの構造では、横口は棺身側に加工をほどこして設ける例（身コ字形開口[(1)]）がほとんどである。蓋には、せいぜい横口と接する範囲に刳り込み程度の加工がほどこされるにすぎない。廻原1号墳のように横口を刳り抜くという方法（身ロ字形開口）は、身と蓋が分離しない同一石材からなる一体造りの例にほぼ限定される。床石のみ別造りとし、蓋を組み合わせる構造では、蓋の部材に加工をほどこして横口を設ける（蓋コ字形開口）。このように、石槨部の構造と横口の加工方法には明確な相関関係があり、それぞれは排他的なあり方を示す[(2)]。

上記の石槨部の構造と横口加工方法の原則から逸脱するのは、河内地域のお亀石古墳、伊豆地域の洞古墳、出雲地域の若塚古墳と廻原1号墳であり、畿内地域から遠隔地の古墳に多い。さらに、遠隔地の例に顕著な特徴として、開口部の上部の内部空間が広いという点がある。コ字形開口に顕著だが、畿内地域の例では横口上部の内部空間は存在してもごくわずかである。このようなロ字形開口にみる変異は、遠隔地の少数例という点から、畿内地域の横口式石槨を周辺地域が受容するに際しての変容と理解できる。お亀石古墳の場合、石槨部を刳抜式石棺とする系列のなかで最古相を示すという位置づけから〔北垣1985、山本1988・2007、和田1989、広瀬1995、林部1998、粟田2002〕、定型化に先立つがゆえの特徴であるとも評価できよう。いま一つ注目しておきたいのは、これらが凝灰岩というそれぞれの地域においてそれ以前に石棺として利用されてきた石材を使用するという点である。凝灰岩は諸地域において産出地が限定される点からも、細部における地域差と地域内での共通性は、それらが諸地域の在地的な石棺製作の延長線上に位置づけうるという既存の枠組みを踏襲することによるところが大きいと考える。

なお、洞古墳では石槨部の周囲に横穴式石室状の割石積みをほどこしており、類例が河内地域にある点が注目される。刳抜式石棺の系譜にある横口式石槨を主に採用する河内地域でも、お亀石古墳では平瓦、松井塚古墳や小口山古墳では割石を石槨の横口部以外の周囲に積み上げる。河内地域と伊豆地域で石槨の構築方法の細部までもが共通する事実は、両地域の直接的なかかわりを示唆する〔鈴木ほか2013〕。洞古墳をはじめ、長砂2号墳や山ヶ鼻古墳、古宮古墳などは河内地域の横口式石槨の周辺への波及実態を示す貴重な事例といえよう。

内部空間構造　廻原1号墳を含む出雲地域の事例の位置づけを考えるうえで注目すべきは、その空間構造である（第6表、第33・34図）。例示した古墳のうち、出雲地域の事例のみ玄室の天井が羨道の天井よりも高く、ほかはすべて石槨部の天井が羨道よりも低い。すなわち、遺体をおさめる石槨部

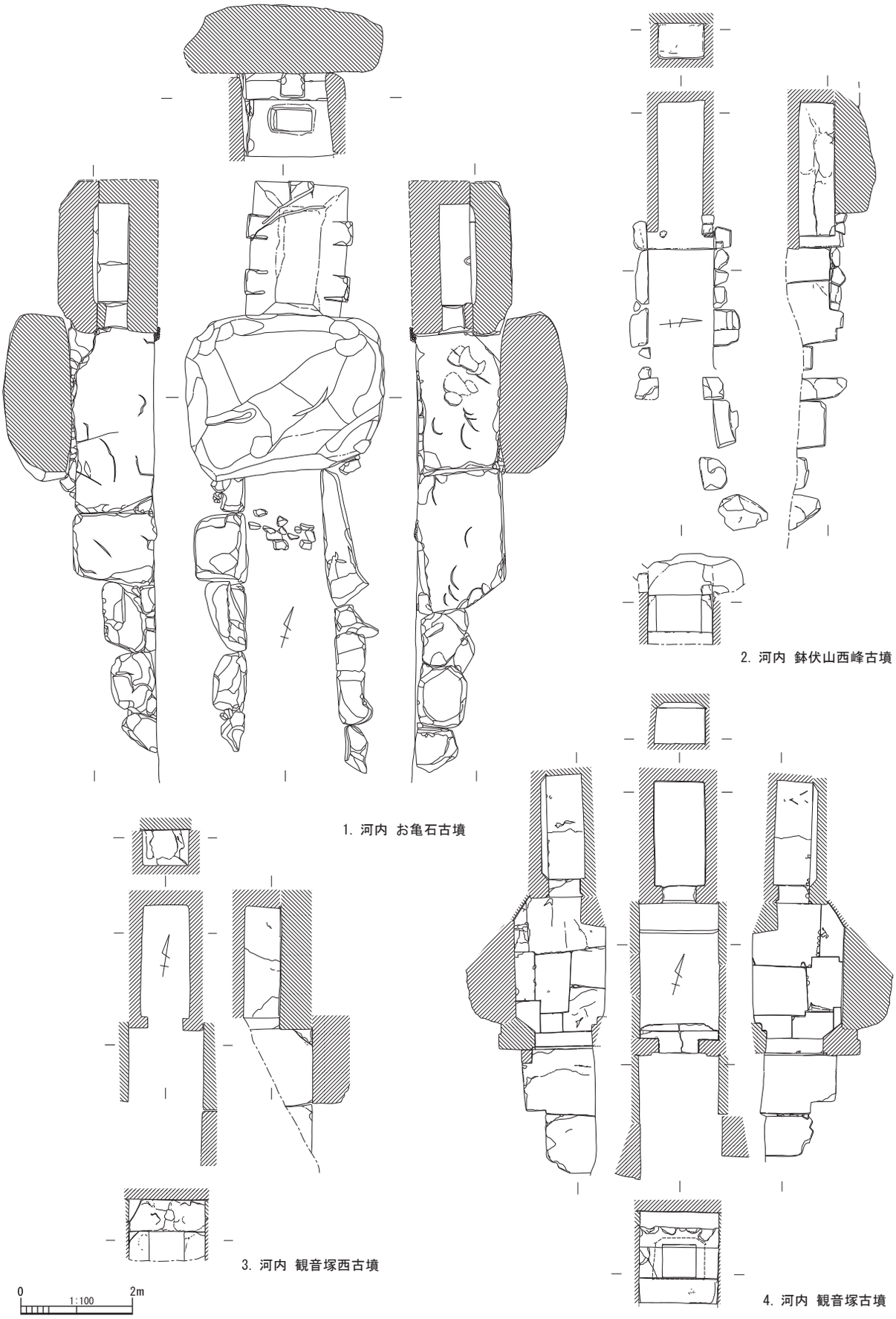


第 32 図　終末期古墳における横口の構造（模式図）

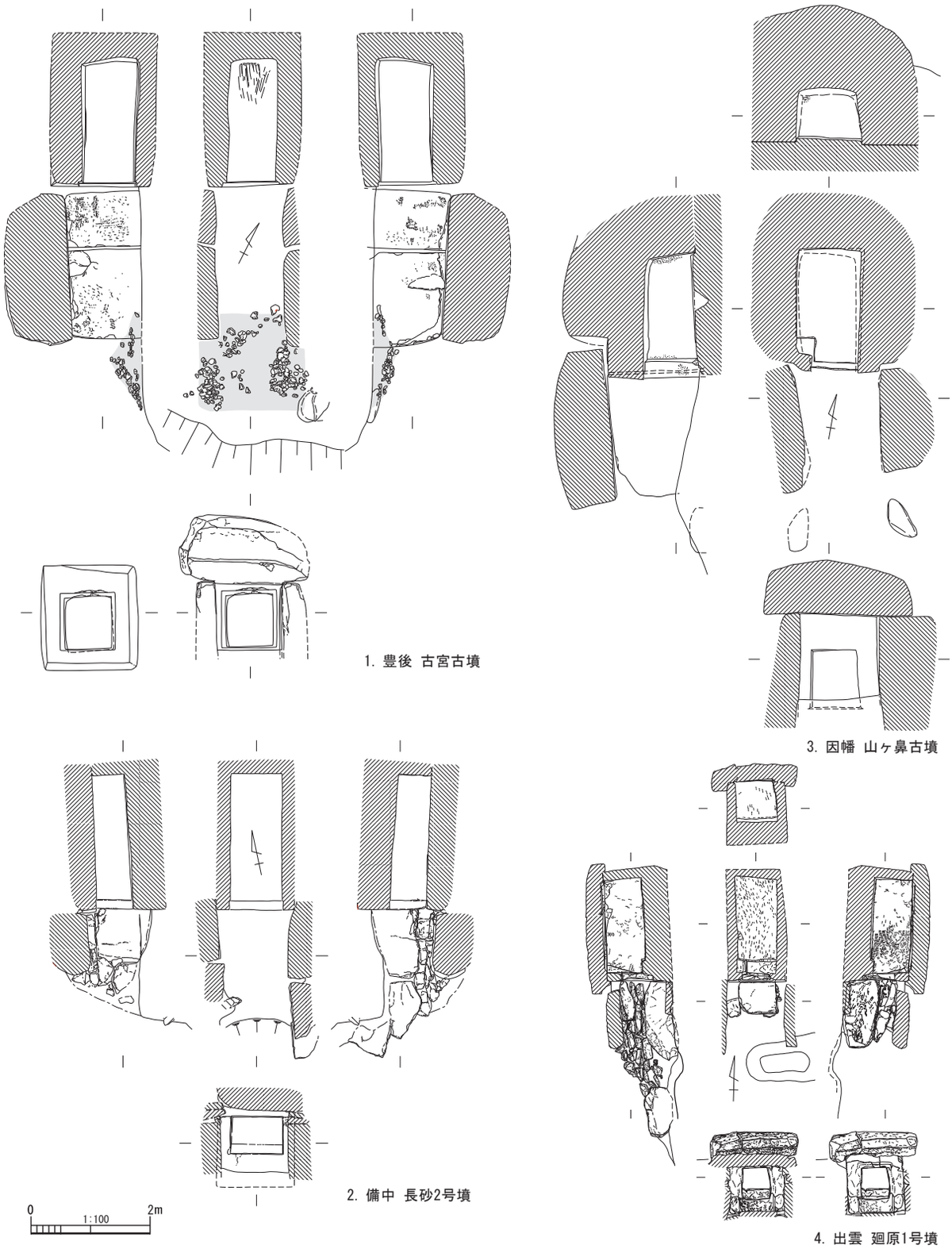
第６表　　刳抜式石棺系とされる横口式石槨とその関連資料

古 墳 名	石 槨 ・ 玄 室					玄室・石槨高		前 室 ・ 羨 道			漆喰	備　考
	構造	横口	閉塞	内　法（cm）	主要石材	天井	床面	構　造	内　法（cm）	主要石材		
河内 お亀石古墳	身蓋別造	身ロ字形開口	石栓	長 178/ 幅 87/ 高 65	凝灰岩〔切石〕	＜	＞	側壁一枚＋天井石 床面玉石敷	長 250/ 幅 140/ 高 150	花崗岩〔割石〕	－	石槨周囲平瓦積 飛鳥Ⅰ新併行か
河内 観音塚古墳	身蓋別造	身コ字形開口	扉石	長 193/ 幅 92/ 高 78	石英安山岩〔切石〕	＜	＞	側壁組合＋天井石	長 245/ 幅 144/ 高 165	石英安山岩〔切石〕	－	横口上下に刳込
河内 観音塚西古墳	身蓋別造	身コ字形開口	－	長 202/ 幅 86/ 高 65	石英安山岩〔切石〕	＜	＞	側壁一枚 ?＋天井石	長 190/ 幅 133/ 高 115+	石英安山岩〔切石〕	石槨前室	－
河内 観音塚上古墳	身蓋別造	身コ字形開口	扉石	長 190/ 幅 83/ 高 65+	石英安山岩〔切石〕	＜?	－	側壁＋天井石	長 120+/ 幅 112/ 高 80+	石英安山岩〔切石〕	石槨	石槨蓋石が３石
河内 鉢伏山西峰古墳	身蓋別造	身コ字形開口	－	長 240/ 幅 80/ 高 65	石英安山岩〔切石〕	＜	＞	側壁組合＋天井石	長 235/ 幅 115/ 高 100+	石英安山岩〔切石〕	石槨	石槨下半は岩盤 刳抜・飛鳥Ⅱ
河内 徳楽山古墳	身蓋別造	身コ字形開口	－	長 165/ 幅 60/ 高 39	凝灰岩〔切石〕	－	－	無羨道	なし	なし	－	横口周囲に刳込 横口床面に段
河内 松井塚古墳	身蓋別造	身コ字形開口	－	長 182/ 幅 75/ 高 63	凝灰岩〔切石〕	＜	＞	側壁割石＋天井石	－	〔割石〕	－	石槨周囲割石積 横口周囲に刳込 飛鳥Ⅲ
河内 小口山古墳	一体造	身ロ字形開口	板石組合	長 213/ 幅 87/ 高 63	凝灰岩〔切石〕	＜	＞	－	－	石英安山岩〔割石〕	閉塞	石槨周囲割石積 横口床面に段
河内 仏陀寺古墳	一体造	身ロ字形開口	石栓	長 179/ 幅 71/ 高－	凝灰岩〔切石〕	－	＞	－	－	－	－	羨道床面塼敷
河内 石宝殿古墳	底蓋別造	蓋コ字形開口	－	長 140/ 幅 90/ 高 70	花崗岩〔切石〕	＜	＞	側壁一枚＋天井石？	長 200/ 幅 138/ 高 146	花崗岩〔切石〕	－	飛鳥Ⅱ
大和 竜田御坊山３号墳	底蓋別造	蓋コ字形開口	石栓	長 225/ 幅 71/ 高 52	花崗岩〔切石〕	－	－	－	－	－	－	須恵質陶棺 横口周辺に刳込
大和 鬼の俎・雪隠古墳	底蓋別造	蓋コ字形開口	－	長 279/ 幅 154/ 高 130	花崗岩〔切石〕	－	－	無羨道	なし	なし	－	－
大和 鬼の俎･雪隠２号墳	底蓋別造	－	－	長 250/ 幅 136/ 高－	花崗岩〔切石〕	－	－	無羨道	なし	なし	－	－
伊豆 洞古墳	身蓋別造	身ロ字形開口	板石	長 200/ 幅 105/ 高 129	伊豆凝灰岩〔切石〕	－	－	－	－	－	－	石槨周囲割石積
備中 長砂２号墳	身蓋別造	身コ字形開口	板石	長 210/ 幅 85/ 高 62	凝灰岩〔切石〕	＜	＞	側壁腰石＆割石＋天井石	長 110/ 幅 120/ 高 110+	花崗岩〔切石〕	－	播磨竜山石製
因幡 山ヶ鼻古墳	底蓋別造	蓋コ字形開口	－	長 175/ 幅 105/ 高 87	凝灰岩〔切石〕	＜	＞	側壁一枚＋天井石	長 310/ 幅 150/ 高 155+	凝灰岩〔切石〕	－	－
豊後 古宮古墳	一体造	身ロ字形開口	－	長 216/ 幅 81/ 高 88	凝灰岩〔切石〕	＜	＞	側壁一枚＋天井石	長 246/ 幅 129/ 高 120	凝灰岩〔切石〕	－	横口周囲に刳込
出雲 若塚古墳	身蓋別造	身ロ字形開口	板石	長 195/ 幅 115/ 高 155	凝灰岩〔切石〕	＞	－	側壁一枚＋天井石	長 115/ 幅 160?/ 高 120?	凝灰岩〔切石〕	なし	玄室内屍床 横口周囲に刳込
出雲 廻原１号墳	身蓋別造	身ロ字形開口	板石	長 164/ 幅 71/ 高 70	凝灰岩〔切石〕	＞	＞	側壁腰石＆割石＋天井石	長 100/ 幅 110/ 高 90	安山岩〔割石〕	なし	横口周囲に刳込

〔凡例〕石槨・玄室の構造ならびに横口の分類名称は、〔鈴木ほか 2013〕を参考とした。
横口式石槨と石棺式石室では、部分名称に違いがある。埋葬空間となる石棺を「石槨・玄室」、その前方にある天井石のある空間を「前室・羨道」とする。
「＋」：以上、「＜」：石槨・玄室より前室・羨道が高い、「＞」：石槨・玄室が前室・羨道より高い、「？」：不確定、「－」：不明ないし特記事項なし。
「切石」は石材の四面を平滑に表面加工して仕上げたものとする。「割石」は粗造り段階以前のものとし、切出し面の平らなものや自然石も含める。



第 33 図　刳抜式石棺系とされる横口式石槨



第 34 図　周辺地域の横口式石槨と関連資料

の内部空間がほかより高さが低くかつ幅が狭いという横口式石槨の特徴から、出雲地域の例は逸脱するのである。その空間構造は、むしろ横穴式石室と共通するものであり、若塚古墳の玄室内に屍床が備わる点も、「開かれた棺」〔和田 1986〕を置く石室としての空間構造を指向するものと評価できる。

さらに羨道の長さも、横口式石槨のほとんどでは２ｍに達するあるいは以上の規模をもつのにたい

して、出雲地域の廻原１号墳と若塚古墳、備中地域の長砂２号墳は１ｍ程度ときわめて短小である。羨道の空間構造にも畿内地域と出雲地域では大きな差がある。

このように出雲地域と他地域とくに畿内地域とでは、いっけん類似した埋葬施設でありながら、その内部空間の構造はまったく異なる。出雲地域の事例は横口式石槨ではなく、むしろ横穴式石室に共通する空間構造であり、「開かれた棺」〔和田 1986〕とのかかわりの強さからも、畿内地域とは異なる埋葬施設の空間利用を想定できる。少なくとも、出雲東部地域の首長墓は、畿内地域の埋葬空間構造をそのまま受け入れることなく、在地の墓制を強く保持したと考えることができるだろう。

（４）出雲型石棺式石室と石棺式模倣系石室

先学によって廻原１号墳は、玄室長軸が石室主軸に直交する定型化した出雲型石棺式石室が、玄室長軸が平行する縦長長方形プランの石室へと変化する契機をなした存在と位置づけられてきた。と同時に、刳り抜き玄門や玄門閉塞石を受ける刳り込みは、出雲型石棺式石室の特徴であるとも指摘された〔出雲考古学研究会 1983、赤沢・広江 1987、西尾 1995〕。

こうした経緯をふまえると、廻原１号墳の埋葬施設を位置づけるには、広域性という観点だけでなく、在地の石室としての見方も必要である。以下では、廻原１号墳が位置する朝酌地域を中心に特徴的な分布をみせる石棺式模倣系石室、ならびに出雲東部地域の石棺式石室と比較検討し、在地という枠組みから廻原１号墳の埋葬施設の位置づけに迫ることとしよう（第７表、第 35・36 図）。

石棺式模倣系石室　石棺式亜流石室〔山本 1964〕あるいは朝酌型石室〔桑原・丹羽野・角田・西尾 1987〕とされる横穴式石室を、石棺式模倣系石室と呼ぶ。先学によれば、この形式の石室は定型化した石棺式石室と同様に、玄室平面プランが横長長方形を呈する平入構造をもつ点が特徴とされ、石棺式石室に使用する切石石材のかわりに入手の容易な割石によって構築する例と定義される。

そのうえで、さらにこの形式の石室の特徴として注目したいのが、玄門構造である[(3)]。羨道側壁と袖石上に羨道天井石を架け、この玄門上部を構成する羨道天井石の上に玄室天井石を設置するという構造は、この種の石室を特徴づける要素であると考える。というのは、ここで注目した構造的特徴は、前壁上に羨道天井石が架かる、あるいは接するという石棺式石室にしばしばみられる構造を、小型石材と最小限の部材で代替することによって創出したものと考えうるからである（第 35 図）。

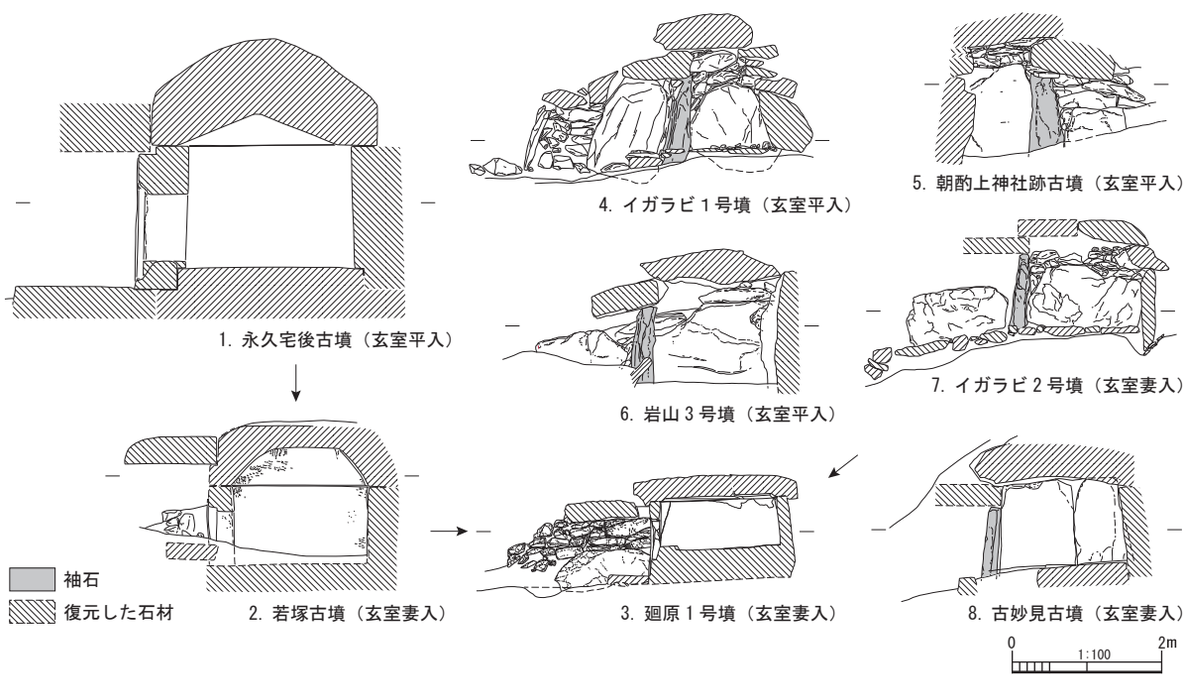
そしてこの玄門の上部構造は、玄室平面形態が横長長方形の石棺式模倣系石室だけでなく、それと酷似する縦長長方形の例でも確認できる。すなわち、石棺式石室と同様に石棺式模倣系石室にも、平入構造と妻入構造という二者をみとめうるのである。そのうえで廻原１号墳の玄門上部に位置する玄室天井石の前面にある刳り込みが、その下に羨道天井石を組み合わせる設計にもとづくものであるという点に着目したい。というのは、この羨道天井石の上に玄室天井石を置くという設計が、石棺式模倣系石室の玄門上部構造と共通すると評価しうるからである。こうしたことから、石棺式模倣系石室のなかでも妻入構造の例は、廻原１号墳の埋葬施設と関係する可能性を想定できる。廻原１号墳の埋葬施設は、玄門を出雲型石棺式石室、その上部構造を石棺式模倣系石室と関連づけることが可能であり、いわば二つの異なる系統の石室の融合形態として創出されたと理解できるのである（第 36 図）。

こうした理解は、石棺式模倣系石室に使用される石材とその用石法が、廻原１号墳の羨道と共通するとした見方ともきわめて整合的である〔岩本 2012〕。大型板石材を立てた腰石の上部に小型の石材を平積みして壁体を構築し、さらに超大型の板石材を天井石とする廻原１号墳の羨道にみる工法は、石棺式模倣系石室に主体的に採用される。こうした点からも、廻原１号墳の埋葬施設と妻入構造の石棺式模倣系石室とのきわめて強いかかわりがうかがわれる。廻原１号墳の埋葬施設は、石棺式石室に

第７表　妻入構造の石棺式石室と石棺式模倣系石室

古 墳 名	玄　室					玄室高		玄室幅	羨　道		
	石室構造	玄門	閉塞	内　法（cm）	主要石材	天井	床面		構　造	内　法（cm）	主要石材
意宇郡 若塚古墳	身蓋別造り 刳抜式石棺系	身ロ字 形開口	板石	長 195/ 幅 115/ 高 155	凝灰岩 〔切石〕	＞	－	＜	側壁一枚＋天井石	長 115/ 幅 160?/ 高 120?	凝灰岩 〔切石〕
島根郡 廻原１号墳	身蓋別造り 刳抜式石棺系	身ロ字 形開口	板石	長 164/ 幅 71/ 高 70	凝灰岩 〔切石〕	＞	＞	＜	側壁腰石＆割石＋天井石	長 100/ 幅 110/ 高 90	安山岩 〔割石〕
意宇郡 鏡北廻古墳	組合式石棺系	梱のみ	板石	長 180/ 幅 100/ 高 120	凝灰質砂岩 〔切石〕	＞	＞	＜	側壁一枚＋天井石	長 75/ 幅 105/ 高 130	凝灰質砂岩 〔切石〕
意宇郡 下の空古墳	組合式石棺系	楣袖 組合式	板石	長 170/ 幅 100/ 高 125+	凝灰質砂岩 〔切石〕	＞	－	＜	－	－	－
島根郡 講武岩屋古墳	組合式石棺系	楣袖 組合式	－	長 180/ 幅 135/ 高 170	凝灰岩 〔切石〕	＞	＜	＝	側壁一枚＋天井石	長 75/ 幅 135/ 高 131	凝灰岩 〔切石〕
島根郡 朝酌上神社２号墳	石棺式模倣系	－	－	長 245/ 幅 105/ 高 140+	安山岩 〔割石〕	－	－	－	－	－	－
島根郡 大井２号墳	石棺式模倣系	－	－	長 240+?/ 幅 90/ 高 50+	安山岩 〔割石〕	－	－	－	－	－	－
島根郡 古妙見古墳	石棺式模倣系	梱袖 組合式	－	長 180/ 幅 120/ 高 120	花崗岩 〔割石※〕	＞	＞	＞	－	－	－
島根郡 池ノ奥２号墳	石棺式模倣系	梱袖 組合式	－	長 180/ 幅 135/ 高 115+	安山岩 〔割石〕	＞	＝	＞	側壁腰石＆割石＋?	長 150/ 幅 100/ 高 70+	安山岩 〔割石〕
島根郡 イガラビ２号墳	石棺式模倣系	梱袖 組合式	－	長 165/ 幅 100/ 高 115	安山岩 〔割石〕	＞	＝	＞	側壁腰石＆割石＋?	長 150/ 幅 100/ 高 70+	安山岩 〔割石〕
島根郡 九日宮３号墳	石棺式模倣系	梱袖 組合式？	－	長 176/ 幅 110/ 高 80+	安山岩 〔割石〕	－	－	－	－	－	－
島根郡 イガラビ８号墳	石棺式模倣系	－	－	長 190/ 幅 90/ 高 40+	安山岩 〔割石〕	－	－	－	－	－	－
島根郡 イガラビ３号墳	石棺式模倣系	梱袖 組合式？	－	長 170/ 幅 70/ 高 80+?	安山岩 〔割石〕	－	－	－	側壁腰石＆割石＋?	長 110/ 幅 ?/ 高 60+	安山岩 〔割石〕
島根郡 イガラビ６号墳	石棺式模倣系	－	－	長 165/ 幅 60/ 高 45+	安山岩 〔割石〕	－	＝	＝	側壁腰石＆?+?	長 100/ 幅 60?/ 高 40+	安山岩 〔割石〕
島根郡 イガラビ４号墳	石棺式模倣系	－	板石	長 160/ 幅 65/ 高 40+	安山岩 〔割石〕	－	－	－	－	－	安山岩 〔割石〕

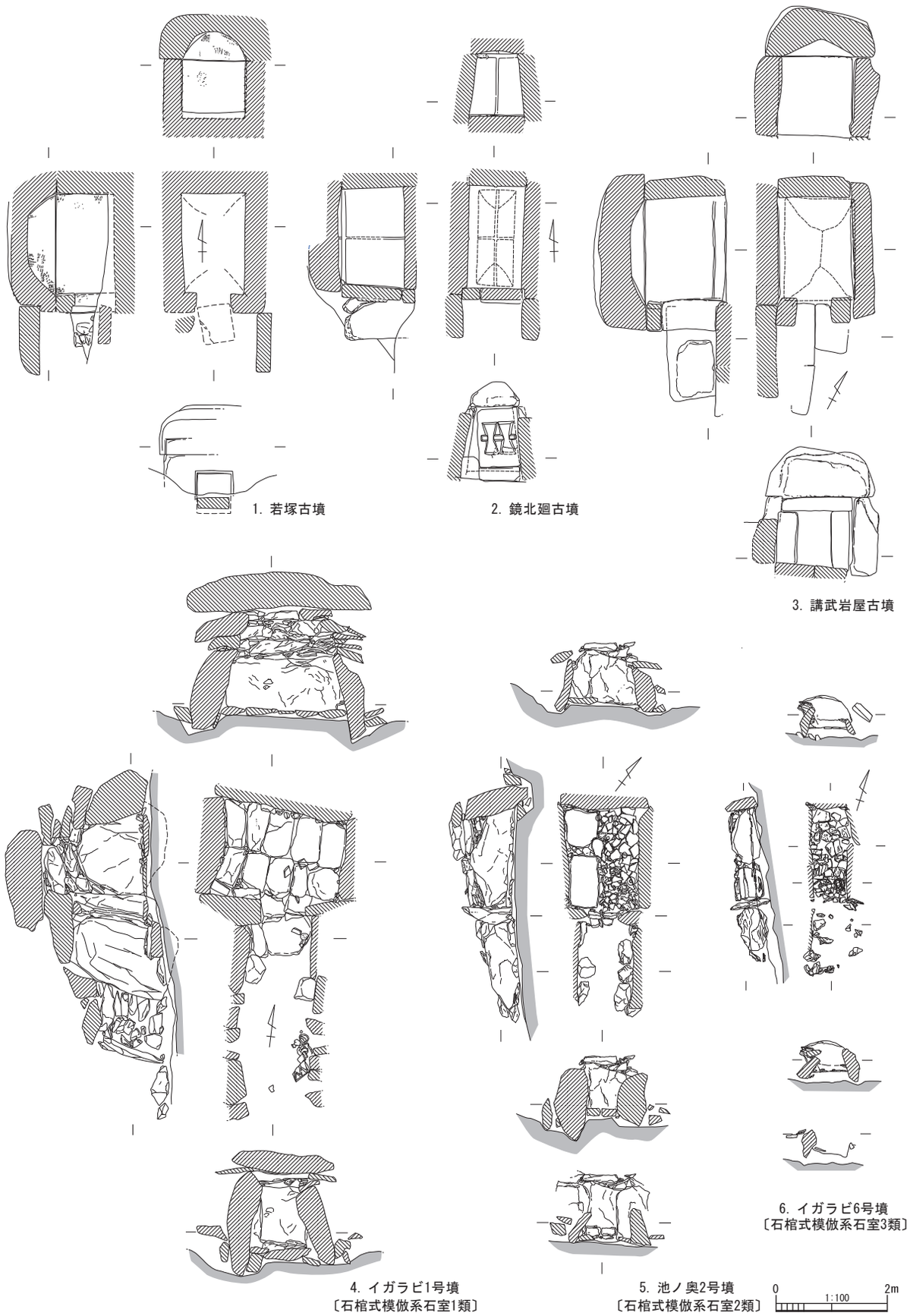
〔凡例〕略号はつぎのとおり。「梱」：梱石、「楣」：楣石、「袖」：袖石、「＋」：以上、「＜」：玄室より羨道が高いあるいは広い、「＞」：玄室が羨道より高いあるいは広い、「＝」：玄室と羨道が等しい、「？」：不確定、「－」は不明ないし特記事項なし。
※古妙見古墳の玄室石材の表面はきわめて平滑であるが、仕上げ加工はほどこされておらず、ノミ状工具で剥離した加工痕がみられることから割石に含めた。「切石」は石材の四面を平滑に表面加工して仕上げたものとする。「割石」は粗造り段階以前のものとし、切出し面の平らなものや自然石も含める。



第 35 図　石棺式石室と石棺式模倣系石室の玄門上部構造

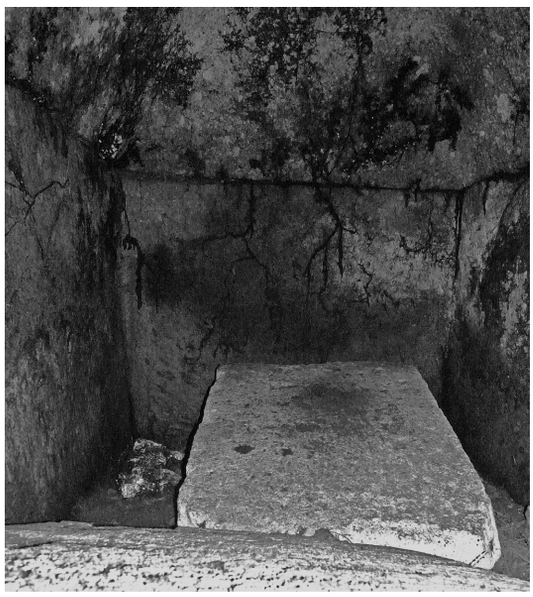
石棺式模倣系石室が逆に影響をおよぼした、両者の融合形態として位置づけることが可能なのである。

石棺式模倣系石室は、形態・構造などから３群に整理できる〔岩本 2014〕。１類は平入の玄室に明瞭な袖部を備え、やや長い羨道をもつ。２類は妻入の玄室に明瞭な袖部を備え、短い羨道をもつ。３類は妻入の玄室であり、袖部は明瞭でなく、玄室と羨道の幅がほぼ揃う小型石室である。１～３類の違いは、出土土器からおもに時期差を反映すると考える〔岩本 2012・2014〕。大谷晃二による出雲地域の須恵器編年、出雲地域と飛鳥地域の併行関係の検討をふまえて私見を加えれば〔大谷 1994・2001〕、１類が出雲５～６Ａないし６a 期で飛鳥Ⅰ併行、２類が出雲６Ｂないし６b･c 期で飛鳥Ⅱ併行、



第 36 図　石棺式石室と石棺式模倣系石室

３類が出雲６ｄ期で飛鳥Ⅲ・Ⅳ併行に年代の定点をもつことになる[(4)]。このうち、廻原１号墳にもっとも近いのは、玄室内部空間とくに幅の狭さから単葬化したとみなしうる石棺式模倣系石室３類である。石棺式模倣系石室との比較から（第７表）、廻原１号墳の埋葬施設は出雲６ｄ期に年代の定点が求められるであろう。



第 37 図　出雲若塚古墳玄室内の屍床（南から）

出雲型石棺式石室　廻原１号墳の埋葬施設は、出雲型石棺式石室のなかでも石室主軸に玄室長軸が平行する縦長長方形プランの妻入りであることを特徴とする。同様の事例には、松江市の鏡北廻古墳、下の空古墳、講武岩屋古墳と、安来市の若塚古墳がある。これら妻入構造の石棺式石室は、玄室の石材のあり方から、組合式と刳抜式に細分することができる（第 36 図）。

妻入組合式は、四壁・床面・天井に別々の切石材を組み合わせて玄室を構成する。これら組合式の諸例は、いずれも刳り抜き玄門をもたず、石棺式石室としてはやや異例の存在となる。その玄門構造には二者があり、玄門立柱石である袖石上に楣石をのせる構造と、玄門構造としては框石のみという例がある。後者には鏡北廻古墳が該当し、大型の閉塞石を用いつつも、複数の石材を組み合わせて玄門を閉塞する。玄門構造の違いはあるが、組合式家形石棺に準ずる形態と構造でありながらも刳り抜き玄門を採用しない点から、定型化した石棺式石室からの変容と評価しうる。したがって、時期的には後出するものとみてよかろう。さらに、楣石を採用する点は、石棺式石室以外の横穴式石室からの影響をうかがわせる。組合式は、石棺式石室のなかでは定型化した平入構造から外的な影響を受けて派生した傍系として位置づけるのが妥当であると考える。

妻入刳抜式については、廻原１号墳と若塚古墳が該当し、刳り抜き玄門という特徴が定型化した石棺式石室と共通する。また、若塚古墳にみる玄室内の屍床の存在から、妻入刳抜式の空間利用が平入構造の石棺式石室とも同じであることがうかがわれる（第 37 図）。こうした点から、玄室を刳抜式横口式石棺とする構造は、定型化した石棺式石室を小型化することによって到達したものと考える。妻入刳抜式の出現は、定型化した石棺式石室との共通性の強さから、妻入組合式とは異なって、石棺式石室としての系統的な推移のなかで無理なく理解しうる。大きな流れとしては、小型化という方向性のもとに出雲型石棺式石室は終焉を迎えたのであろう。

こうした見方は、廻原１号墳からそのほかの妻入石棺式石室に変遷したとする既往の理解とは異なる〔桑原・丹羽野・角田・西尾 1987、大谷 1996 など〕。しかし、あらためて廻原１号墳の埋葬施設をほかの出雲型石棺式石室と比較すると、以下のようにさまざまな点で廻原１号墳には後出的な要素が目立つ。廻原１号墳を出雲型石棺式石室の終焉を告げる存在と考える所以である。

・若塚古墳では玄室内に屍床を備えるが、廻原１号墳ではみとめられないこと。
・玄門周囲の閉塞石を受ける刳り込みが、廻原１号墳ではごく浅く痕跡器官化していること。
・若塚古墳では羨道を玄室と同じ凝灰岩の切石とするが、廻原１号墳では異なる割石とすること。
・若塚古墳では玄室天井石上に羨道天井石があるが、廻原１号墳はその上下関係が逆であること。
・廻原１号墳では、他例にはない玄室天井石内面に刳り込みを設け、玄室と組み合わせること。
・廻原１号墳の玄室空間が出雲型石棺式石室のなかではもっとも狭小であること。

（5）出雲型石棺式石室の終焉と単葬化

出雲型石棺式石室の構造的特質　九州系横穴式石室にみる本質的側面として、「開かれた棺」〔和田 1986〕をおさめるがゆえに、玄室空間を埋葬施設内において明確に区画する指向性を増すという指摘がある〔蔵冨士 1997〕。そうした観点に立つならば、刳抜式石棺を玄室とする廻原1号墳の埋葬施設は、「開かれた棺」〔和田 1986〕がその分布集中域の周縁において特異な発達をとげた、極端な姿とみなしうる。すなわち、玄室を棺とみたてようとする空間利用と指向性を、「玄室＝棺」としてもっともシンプルに実現した構造として、廻原1号墳を位置づけることができるのである。

さらに、こうした評価は出雲型石棺式石室の成立を理解するうえでも示唆的な見方をもたらす。というのは、そもそも出雲型石棺式石室が、「玄室＝棺」という空間利用を指向して成立した構造である可能性を考慮しうるからである。出雲型石棺式石室はその成立から終焉に至るまで、玄室内部空間を石棺にみたてるという、九州系横穴式石室がもつ本質の構造化のための空間利用を指向しつづけたところに、もっとも大きな特質があるといえよう。

横口式石槨との差異　出雲型石棺式石室あるいは廻原1号墳の埋葬施設は、いっけん河内地域の横口式石槨にみる家形石棺に羨道を付属する構造と共通するようにみえる。しかし、横口式石槨の石棺が石槨として機能する点は、石棺が玄室として機能する出雲型石棺式石室や廻原1号墳のあり方とはまったく異なる。横口式石槨にみる内部空間に漆喰を使用し、さらに別の棺を格納する構造をもつ点は、畿内地域が保持しつづけた「閉ざされた棺」〔和田 1986〕の空間利用の延長線上にある。横口式石槨の内部にほどこされる壁画の写実性や内容が、「開かれた棺」〔和田 1986〕をおさめる九州系横穴式石室にみる象徴的な装飾とは、思想的な背景を異にすることもあらためて述べるまでもなかろう。九州系横穴式石室が特異な発達をとげた存在として、出雲型石棺式石室は葬送にかかわる思想的背景という点においても、やはり横口式石槨とはまったく異なるのである。

出雲型石棺式石室の単葬化と終焉　とはいえ、出雲型石棺式石室が妻入となる点は、その内的な展開のみで説明することが難しい。葬送観念あるいは他界観という本質的側面に差はあるが、玄室の小型化と密閉指向のもとに成立したと考えうる横口式石槨の一部と、玄室を棺にみたてる石棺式石室の最終形態は、ともに石棺を埋葬空間として特化させるという現象面が共通し、その結果として単葬化を果たす。そうした点で、出雲東部の首長墓に採用される出雲型石棺式石室にみる変化が、畿内地域の横口式石槨の動向と関連するものであった可能性を完全に排除することはできない。しかし本稿で検討したように、そうした外的な影響があったとしても、それは出雲型石棺式石室にみる埋葬空間の利用方法や空間構造といった葬送観念の本質におよぶ変化を促すほどのものではなかったことだけは間違いない。むしろ、出雲型石棺式石室が終焉形態に至る背景には、在地のほかの横穴式石室からの影響など多様な背景[(5)]を想定したほうが理解しやすい。

出雲型石棺式石室は、平面形態に端的に顕在化した、平入構造から妻入構造という空間利用の転換によって、終焉への動きを強めることとなる。そして、その最終段階には玄室内部空間が縮小し、単葬化を果たしたとみられる。この単葬化という動きの発端じたいは、横口式石槨の系譜や〔森 1972〕、首長墓および群集墳での埋葬施設の小型化の時期という〔太田 2006〕、列島における墓制の展開から畿内地域に求めうる可能性が高い。しかし、出雲型石棺式石室の単葬化の背景には、畿内横口式石槨の導入という直接的な契機よりも、日本列島における広域的な墓制にみる単葬化という運動との同期を想定するほうが、ほかの埋葬施設とのかかわりが顕著となる点でも整合的であると考える。古墳埋葬の単葬化の背景にはもちろん、横口式石槨の波及・拡散という畿内地域における動向が少な

からず影響をおよぼしていることは間違いない。しかし、埋葬にかかわる空間構造や空間利用という本質的な側面においては、畿内地域から過度の影響を受けることなく、自律性を保持しつづけたとみなしうる点に、出雲東部地域の地域的特質をみいだすことができよう。

ただし、出雲型石棺式石室の終焉の背景を、それまでの古墳築造と同じように緩やかな関係性を基盤とした広域的な動向の一環として理解しうるかは、また別の議論となる。出雲東部地域では首長墓の築造停止が出雲型石棺式石室の終焉と一致するわけだが、そうした突発的ともいえる事態を広域における連動的な変化にともなうと理解することには躊躇を覚える。首長墓の築造停止以降、廻原１号墳でも確認できるように、古墳の継続使用や再利用は広くみとめられる。このことは、首長層の動向とは別の次元において古墳祭祀の意義が保持された可能性をうかがわせる。首長墓の築造停止と古墳の継続使用・再利用の対比的なあり方からは、出雲型石棺式石室の終焉にはむしろ思想的な部分にまでおよぶ外部からの強い影響を想定できよう。畿内地域における古墳の終末は〔白石 1982〕、時期的には出雲東部地域での首長墓築造の停止とスムーズに連動するようであり、そうした点からは出雲型石棺式石室の終焉の背景に、それまでとは異なるより直接的かつ強い影響力を考慮しうる。古墳築造という旧態からの脱却こそ、社会形成にみる一大画期と評価すべきなのである。

おわりに

本稿では、廻原１号墳の埋葬施設の位置づけを明らかにするため、畿内地域の横口式石槨ならびに出雲型石棺式石室や石棺式模倣系石室をとりあげ、空間構造と空間利用という観点から検討した。その結果、廻原１号墳の埋葬施設を出雲型石棺式石室の終焉形態と位置づけ、畿内横口式石槨とは内部空間構造と空間利用を異にすること、石棺式模倣系石室という在地的な横穴式石室[6]と関連性をもちつつ展開することなどを指摘した。なお、石棺式模倣系石室との形態的な変化の連動性などから、廻原１号墳の築造年代の目安として出雲６ｄ期＝古代出雲Ⅱ期≒飛鳥Ⅲ・Ⅳという年代観を付与した。

出雲型石棺式石室はその成立から終焉に至るまで、玄室を棺にみたてようとする指向性を維持しつづけ、「玄室＝棺」を構造化する方向性のもと展開したと評価しうる。こうした出雲型石棺式石室にみる空間利用は、畿内横口式石槨とは異なるものであり、出雲東部地域と畿内地域との結びつきは古墳時代終末期において一定の距離を保持した緩やかなものであったと考える。むしろ、出雲東部地域における出雲型石棺式石室にあらわれた「開かれた棺」〔和田 1986〕としての特異な発達をとげた葬送観念や他界観念は、畿内社会にとって著しく異質なものであったに違いない。出雲は列島古代社会のなかで、畿内と九州の境界にあたるような位置にあった可能性がうかがわれよう[7]。

そのいっぽう、埋葬施設の単葬化と正南北に主軸をとる設計、さらにはいわゆる山寄せの古墳としてのあり方や谷奥への立地、特異な墳丘形態などは、出雲東部地域の内的な古墳の変遷だけでは説明しがたく、広域におよぶ集団関係によって墓制が影響を受けたことに起因すると考える。

いずれにせよ、出雲東部地域における古墳築造終焉段階の様相からは、中央集権的な地域間関係はみいだしがたい。出雲国成立過程における中央と周辺の関係には、さまざまな位相が重層する複雑な事情を想定できるであろう。

註

（１）分類名称と分類基準については、鈴木一有氏らの研究を参考とした〔鈴木ほか 2013〕。

（２）畿内地域では、身蓋一体造りやロ字形開口など、石材を刳り抜く構造の石槨に軟質の凝灰岩が使用される傾向がある。硬質の安山岩や花崗岩を用いる横口式石槨は構造を異にしており、石槨構造と石材の硬軟とは大まかに対応するようだ。この点は、後述するように凝灰岩製石棺の製作がおもに石材産出地でおこなわれ、

製品の搬出を基本とすることが背景にあると考える。安山岩や花崗岩を材とする横口式石槨は、その石材を近隣で入手していたようであり、その構築は横穴式石室と同様の現地調達を基本とする点で差がある。少なくとも、製作にかかわる石材調達のありようから、横口式石槨には石棺系と石室系の二系統をみとめうる。

（３）横穴式石室の玄門構造に着目した分析に、坂本豊治の研究がある〔坂本 2012〕。坂本は玄門構造に組列を想定して編年に活用するが、本稿では石室の系統的な分析に有効な視点として着目する。

（４）出雲地域と飛鳥地域の須恵器編年の併行関係や、暦年代決定については吟味を要する〔花谷 2008〕。現状は、出雲６ｄ期〔大谷 2001〕＝古代出雲Ⅱ期〔岡田ほか 2010〕について、おおよそ飛鳥Ⅲに併行するという理解と〔大谷 1994・2001〕、隠岐地域の畿内産とされる土師器を介して飛鳥Ⅲの一部と飛鳥Ⅳに併行するという理解がある〔池淵 2010〕。須恵器坏Ｂ蓋の内面かえりが飛鳥Ⅳまで残存する点を重視すれば、出雲地域においても共通するという様相比較から、出雲６ｄ期＝古代出雲Ⅱ期＝出雲国府第１型式≒飛鳥Ⅲ・Ⅳというおおよその併行関係を想定できるだろう。さらに、廻原１号墳の築造時期とみる出雲６ｄ期・古代出雲Ⅱ期（飛鳥Ⅲ・Ⅳ併行）に後続する、出雲７期・古代出雲Ⅲ期（飛鳥Ⅴ以降）は、出雲国府「三太三」墨書須恵器から 726 年以前に年代の定点をもつ。たいして、飛鳥Ⅲは 660 年代から 670 年代、飛鳥Ⅳは 680 年代から 690 年代、飛鳥Ⅴが藤原宮期（694 年以降）とされる〔菱田 2011〕。両地域の土器の様相比較とそれぞれの地域の資料にもとづく暦年代観に大きな矛盾はない。土器の様相比較による併行関係の想定はある程度有効であるとみていだろう。したがって、廻原１号墳の築造を暦年代で示すならば、７世紀後半となろう。

（５）出雲型石棺式石室の広域への影響を想定しうる例として、北摂地域の兵庫県三田市に所在する奈良山 12 号墳がある〔高島・潮崎 1983〕。奈良山 12 号墳の埋葬施設の玄室は（櫃本誠一氏のご教示）、刳り抜き玄門をもつ点で、出雲型石棺式石室との関係がうかがわれる。また、やや距離が近いが、伯耆地域の福岡岩屋古墳〔中山（編）1990〕も初期の石棺式石室にみる広域的な関係をうかがわせる。

（６）石棺式模倣系石室の分布が、『出雲国風土記』にみる出雲国庁から朝酌渡を介して島根郡家を経由し、隠岐国への渡海点となる千酌駅家へ向かう枉北道との関連で説明しうる点は示唆的である。その分布は朝酌・大井地域に集中するとともに、千酌地域の岩山古墳群にもあり、『出雲国風土記』の記載と重なるあり方を示す。

（７）『記紀』において、出雲を舞台とした神話が散見されるのは、本稿で示した出雲の他界観や葬送観念が、畿内社会にとってきわめて異質であったことが背景にあると想像する。そしてそれが端的に描写されたのが、いわゆる「黄泉国訪問譚」ではなかろうか。古墳築造終焉以降、畿内社会にとってその外縁に位置する出雲との関係が進展したことは、律令国家成立の正当性を示すうえで大きな意義があったのだと推測する。

引用文献

赤沢秀則・広江耕史　1987「石棺式石室の構造と変遷」『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会　pp. 215-229

網干善教　1973「大化二年三月甲申詔にみえる墳墓の規制について」『論集 終末期古墳』塙書房　pp. 175-209

粟田　薫　2002「お亀石古墳の築造年代―新堂廃寺出土平瓦との比較をとおして―」『藤沢一夫先生卒寿記念論文集』同刊行会　pp. 16-32

粟田　薫（編）2003『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』富田林市埋蔵文化財調査報告 35　富田林市教育委員会

池淵俊一　2010「第１節　島前地域の横穴墓に関する二、三の問題」『黒木山横穴墓群』島根県西ノ島町教育委員会　pp. 27-47

出雲考古学研究会　1983「山陰における刳抜き「石棺式石室」について―特異な構造を有する３古墳の紹介―」『古文化談叢』第 12 集 発刊 10 周年記念論集　九州古文化研究会　pp. 333-341

出雲考古学研究会　1987『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会

泉森　皎（編）1977『竜田御坊山古墳　付 平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 32 冊　奈良県教育委員会

岩本　崇　2012「廻原一号墳と「古代出雲の朝酌」」『出雲古代史研究』第 22 号　出雲古代史研究会　pp. 9-31

岩本　崇　2014「出雲地域における古墳終焉の一様相」『一般社団法人日本考古学協会第 80 回総会研究発表要旨』一般社団法人日本考古学協会　pp. 48-49

梅原末治・石倉暉榮　1920「出雲に於ける特殊古墳（中の下）」『考古学雑誌』第 11 巻第３号　日本考古学会　pp. 1-14
太田宏明　2006「終末期古墳の変遷と古墳薄葬化の過程」『古代学研究』第 172 号　古代学研究会　pp. 22-38
大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会　pp. 39-82
大谷晃二　1996「出雲東部の横穴式石室」『山陰の横穴式石室―地域性と編年の再検討―』第 24 回山陰考古学研究集会　pp. 20-29
大谷晃二　2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第８集　島根県出雲土木建築事務所・島根県平田市教育委員会　pp. 43-54
大谷晃二　2009「山陰の終末期古墳」『前方後円墳の終焉とその後』第 12 回中国四国前方後円墳研究会　中国・四国前方後円墳研究会　pp. 33-53
岡崎雄二郎・中尾秀信・藤原裕子・庄司健太郎・瀬古諒子ほか（編）　1990a　「イガラビ古墳群」『鈩田遺跡・朝酌荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥Ｃ、Ｄ遺跡』（『島根県松江市松江東工業団地内発掘調査報告書』）　松江市・松江市教育委員会　pp. 209-334
岡崎雄二郎・中尾秀信・藤原裕子・庄司健太郎・瀬古諒子ほか（編）　1990b　「池ノ奥古墳群」『鈩田遺跡・朝酌荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥Ｃ、Ｄ遺跡』（『島根県松江市松江東工業団地内発掘調査報告書』）　松江市・松江市教育委員会　pp. 337-412
岡田裕之・土器検討グループ　2010「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究―古代山陰地域の土器様相と領域性―』島根県古代文化センター　pp. 13-43
角田徳幸・守岡正司・原田敏照　1997「西山陰における古墳（群集墳）の終焉と火葬墓の出現」『古墳時代から古代における地域社会』第 41 回埋蔵文化財研究集会　埋蔵文化財研究会　pp. 64-74
角田徳幸　2012「116　廻原古墳群」『松江市史』史料編２考古資料　松江市　pp. 291-292
河内一浩　2007「小口山古墳・小口山東古墳」『羽曳野市内遺跡調査報告書―平成 16 年度―』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 59　羽曳野市教育委員会　pp. 35-49
北垣聰一郎　1985「いわゆる終末期石槨古墳の構造的変遷について―大和・河内地域を中心として―」『末永先生米壽記念献呈論文集』乾　末永先生米寿記念会　pp. 845-874
蔵冨士寛　1997「石屋形考―平入横口式石棺の出現とその意義―」『先史学・考古学論究』Ⅱ　熊本大学文学部考古学研究室創設 25 周年記念論文集　熊本大学文学部考古学研究室　pp. 133-166
桑原真治・丹羽野裕・角田徳幸・西尾克己　1987「出雲地方における後期古墳文化と石棺式石室」『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会　pp. 230-261
坂本豊治　2012「横穴式石室の玄門構造からみた中村１号墳」『中村１号墳』出雲市の文化財報告 15　出雲市教育委員会　pp. 233-256
白石太一郎　1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第１集　国立歴史民俗博物館　pp. 79-120
鈴木一有・菊池吉修・大谷宏治・田村隆太郎・井口智博・和田達也　2013「洞古墳の研究―伊豆における横口式石槨―」『古代文化』第 65 巻第２号　財団法人古代学協会　pp. 35-54
高島信之・潮崎誠（編）　1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅰ　兵庫県三田市文化財調査報告書第２冊　兵庫県三田市教育委員会
中山和之（編）　1990『向山古墳群　向山古墳群・瓶山古墳群・石馬谷古墳の調査』淀江町埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集　鳥取県淀江町教育委員会
仁木　聡　2003「出雲」『季刊 考古学』第 82 号 特集 終末期古墳とその時代　雄山閣　pp. 49-52
仁木　聡　2010「山陰地方における後期・終末期古墳の領域性」『出雲国の形成と国府成立の研究―古代山陰地域の土器様相と領域性―』島根県古代文化センター　pp. 239-257
西尾克己　1995「古墳・横穴墓からみた古代社会―六、七世紀の出雲東部と西部の様相―」『風土記の考古学』３ 出雲国風土記の巻　同成社　pp. 129-148
花谷　浩　2008『出雲における県（あがた）の歴史考古学的研究』平成 19 年度科学研究費補助金（奨励研究）

成果報告書　出雲市文化観光部文化財課
羽曳野市教育委員会（編）　1998『河内飛鳥と終末期古墳　横口式石槨の謎』吉川弘文館
林部　均　1998「大和・河内における横口式石槨の成立と展開―飛鳥時代の古墳研究ノート―」『網干善教先生古稀記念考古学論集』上巻　網干善教先生古稀記念会　pp. 927-954
菱田哲郎　2011「後期・終末期の実年代」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学１　同成社　pp. 222-230
広瀬和雄　1995「横口式石槨の編年と系譜」『考古学雑誌』第 80 巻第４号　日本考古学会　pp. 34-74
松本岩雄　1990「山陰」『古墳時代の研究』10 地域の古墳Ⅰ　西日本　雄山閣　pp. 61-80
松本岩雄　1997「朝酌岩屋古墳・廻原１号墳」『古代出雲を歩く』山陰中央新報社　pp. 104-105
真野和夫・讃岐和夫（編）　1982『古宮古墳』大分市文化財調査報告第４集　大分市教育委員会
森　浩一　1972「奈良・大阪における横口式石槨の系譜」『壁画古墳高松塚調査中間報告』奈良県立橿原考古学研究所　pp. 69-75
森本　徹（編）　2010『ふたつの飛鳥の終末期古墳　河内飛鳥と大和飛鳥』平成 21 年度冬季特別展　大阪府立近つ飛鳥博物館
山本　彰　1981『羽曳野の終末期古墳』羽曳野市の文化財第１集　羽曳野市教育委員会
山本　彰　1988「終末期古墳の編年―大阪府南部の古墳を中心として―」『網干善教先生華甲記念考古学論集』網干善教先生華甲記念会　pp. 645-663
山本　彰　2007『終末期古墳と横口式石槨』吉川弘文館
山本　清　1956「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」『島根大学論集（人文科学）』第６号　島根大学　pp. 114-125
山本　清　1964「古墳の地域的特色とその交渉―山陰の石棺式石室を中心として―」『山陰文化研究紀要』第５号　島根大学　pp. 43-73（1971『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会　pp. 343-373　に所収）
和田晴吾　1986「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元６　講談社　pp. 105-119
和田晴吾　1989「畿内横口式石槨の諸類型」『立命館文学』10 号　立命館史学会　pp. 23-49

図表出典

第 31 図　廻原１号墳：本書

第 32 図　鈴木ほか 2013 第 16 図を参考に、報告書等と実物観察により作成。お亀石古墳：粟田（編）2003 第 39 図、洞古墳：鈴木ほか 2013 第 11・12 図、廻原１号墳：本書、若塚古墳：出雲考古学研究会 1987 第 63 図、松井塚古墳：山本 2007 図 17、観音塚古墳：山本 1981 図６、徳楽山古墳：山本 1981 図 20、御坊山３号墳：泉森（編）1977 第 16・17 図、鬼の俎・雪隠古墳：網干 1973 第４図、宮前山古墳：山本 1981 図 17、仏陀寺古墳：森本（編）2010 図版 134、小口山古墳：山本 1981 図 18、河内 2007 図 24、古宮古墳：真野・讃岐（編）1982 第 10 図

第 33 図　１．お亀石古墳：粟田（編）2003 第 39 図、２．鉢伏山西峰古墳：山本 1981 図 14、３．観音塚西古墳：山本 1981 図 13、４．観音塚古墳：山本 1981 図６

第 34 図　１．古宮古墳：真野・讃岐（編）1982 第 10 図、２．長砂２号墳：出雲考古学研究会 1987 第 141 図、３．山ヶ鼻古墳：出雲考古学研究会 1987 第 137 図、４．廻原１号墳：本書

第 35 図　１．永久宅後古墳：出雲考古学研究会 1987 第 47 図、２．若塚古墳：出雲考古学研究会 1987 第 63 図、３．廻原１号墳：本書、４．イガラビ１号墳：岡崎ほか 1990a 第５図、５．朝酌上神社跡古墳：出雲考古学研究会 1987 第 89 図、６．岩山３号墳：出雲考古学研究会 1987 第 98 図、７．イガラビ２号墳：岡崎ほか 1990a 第 16 図、８．古妙見古墳：出雲考古学研究会 1987 第 79 図。

第 36 図　１．若塚古墳：出雲考古学研究会 1987 第 63 図、２．鏡北廻古墳：出雲考古学研究会 1987 第 37 図、３．講武岩屋古墳：出雲考古学研究会 1987 第 67 図、４．イガラビ１号墳：岡崎ほか 1990a 第５図、５．池ノ奥２号墳：岡崎ほか 1990b 第 21 図、６．イガラビ６号墳：岡崎ほか 1990a 第 43 図

第 37 図　若塚古墳：岩本撮影

第６・７表　出雲考古学研究会 1987、山本 1988 に加え、報告書など一次文献の記載をもとに、実物観察の所見や計測結果などもふまえて作成